ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第137号 2026年5月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 1893年米国シカゴ世界博覧会における教育出品と大阪	小宮山 道夫	2
東京教育大学新聞会の「教室の素顔 分岐点に立つ学問」特集 ―『教育大学新聞』第525号（昭和45年2月10日）前半 ―	谷本 宗生	11
女子教育史散策・昭和戦時下編（86） 共立女子学園の場合 2	長本 裕子	15
進学案内書にみる戦前期東京の予備校（25）： 『一目瞭然東京遊学学校案内』（大正11年）（1）	吉野 剛弘	23
『嘉納治五郎』（1964年）を読む(9) 嘉納塾における嘉納治五郎（その4）	冨岡 勝	27
刊行要項（2026年2月15日改訂）		30
短評・文献紹介 アニメキャラクターの AZALEA（パリピ孔明；第11 話）と スタグネイト《遣い》（最果てのパラディン 鉄錆の山の王；第 5 話）について（谷本宗生）、髙橋裕子編著『女子教育のパイオニア 津田梅子』――その生涯と女子英学塾建学の精神――を読んで（長本裕子）、佐藤まどか著『少女と毒』について（冨岡勝）		31
会員消息 谷本宗生、山本剛、冨岡勝		34

コラム

1893年米国シカゴ世界博覧会における教育出品と大阪

小宮山 道夫（広島大学）

昨年2025年は大阪・関西万国博覧会が大きな話題となった。そもそもの開催の是非に始まり、跡地の利用を見越した長期的な計画の是非、予算説明に比して結局膨大な税金をつぎ込み、喉元過ぎればなんとやら、なのか、寝た子を起こすな、なのか、何だか有耶無耶のままに過ぎた感の経費問題など、人々の色々な欲望や思惑と賛否両論とが渦巻いた国家イベントであった。

想定した184日間の会期中の想定来場者数2,820万人には届かなかったものの、総来場者数は約2,558万人を数えた(1)。いざ博覧会が始まれば、多くの人々が会場に足を運び、平均来場回数は2.3回(2)、来場者の満足度も各年代で8割前後を記録したという(3)。前評判の良くなかったマスコットキャラクター「ミャクミャク」も、結局「コミャク」たちとともに人々の心を鷲づかみにし、一大人気キャラクターへと成長した。今年3月までのグッズ売り上げは1,291億円に及び、グッズ販売期間を2028年3月末まで延長するそうだ(4)。

かく言う筆者も仕事ながら会場には7月17日と8月22日の2度足を運んだ。

---

(1) 経済産業省「大阪・関西万博の開催実績及び成果の整理(案)」2025年12月。第1回 2025年日本国際博覧会成果検証委員会配付資料4(https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/results_verification/001.html)参照。

(2) 同前。

(3) 株式会社ビデオリサーチ VR Digest+「大阪・関西万博を"来場者タイプ別"に分析！年代別・来場回数別の満足度＆人気パビリオンランキング」(https://www.videor.co.jp/digestplus/article/consumer251127.html)参照。

(4) ラジトピ ラジオ関西トピックス「「ミャクミャク」グッズ売上1200億円超え！2028年3月まで販売延長《Expo Legacy》」https://news.yahoo.co.jp/articles/42c71cb5f044dc0757a0537bf99e7d10cd9b1482 参照。

どうやら平均的な来場者と言えそうだ。満足度はと言えば、7月は人が少なかったため6割ぐらい、8月は人が多くて辟易したこともあり3割ぐらいになるのだろうと思う。留学生たちの引率で楽しむどころではなかったのも背景にあるが、長蛇の列は容易に想像がつくだろうに日よけや雨よけの仕組みのないパビリオン周囲の空間や、来場者の方向感覚を失わせる会場中央の「静けさの森」の存在などの構造上の問題を除けば、不満のほとんどは、パビリオンの予約や混雑状況の把握には一切貢献しない公式アプリや、分かりづらい上にペーパーレス推奨のためとして紙媒体は有料化されていた公式マップ、入場時間が指定されているが実は守らずとも入場でき、正直者が馬鹿をみる抜け穴のあるルール、一切キャンセルできないチケット販売など、運営体制への不満によるところが大きい。

一方、派遣という働き方を日本に根づかせた企業が運営するため入るのが躊躇われたパビリオンは前回大阪万博へのオマージュを感じさせる展示やiPS細胞の展示が良かった。贅沢な作りで無駄にも思えた日本館はテーマと内容に説得力があり、ミャクミャクが生まれた背景も理解できて素晴らしかった。単独でパビリオンを設けることの出来ない国々が集められたコモンズ各館は、スタッフの勤務態度や個性を含めてその国らしさが出ていて、まさに万博の観、文化の違いを楽しめた。シンボルの大屋根もできれば残して欲しいほどに美しく、見上げる姿も登った景色も圧倒的だった。会場近隣に住んでいるなど、年間パスポートで足繁く通える環境にあれば、かなり楽しめた万博だったのではないだろうかと思う。

さて、ついつい前振りが長くなった。大阪・関西万博の思い出や後日談だけでもまだまだ書けてしまうので、切り上げて、本題に移ろう。100年以上前の博覧会の話である。1893(明治26)年に米国シカゴで博覧会が開催された。これはコロンブス（閣龍）のアメリカ上陸（1492年10月12日）から数えて400年目を記念して企画された世界博覧会だった。シカゴ、ニューヨーク、セントルイス、ワシントンが誘致を争い、8回に及ぶ投票の末にそれぞれ157、107、25、18の得票でシカゴが勝ち取った。当時歴代最大の規模で企画され、1,037エーカー（噎）、約420ヘクタールの会場敷地は大阪・関西万博の約155ヘクタールの2.7倍、皇居の約

115ヘクタールと比べても約3.5倍の広さに相当する。2,650万ドル（弗）と言われた予算は、現在の約9億200万ドルに相当し、日本円にして約1,576億円となる(5)。建設費だけで最大2,350億円と見込まれた現代のハイテク仕様の大阪・関西万博とは比べるべくもないが(6)、「何れの点より見るも現十九世紀の最大博覧会たるべきこと蓋し疑なかるべし」との表現に違わぬイベントであった(7)。参加国は「仏国、西班牙、英国、墨西哥、閣記(ママ)比亜、独逸、白露、支那、ベネジューラ、サンドミンゴ、智利、土其(ママ)古、ペルシア、露国、日本、ジャメイカ、ハイチ、暹羅、エクワドル、ウルガイ、サンサルバトル、ホンドラス、アルゼンチン」と23カ国に及んだ。会期は5月1日から10月26日までの179日間だった。

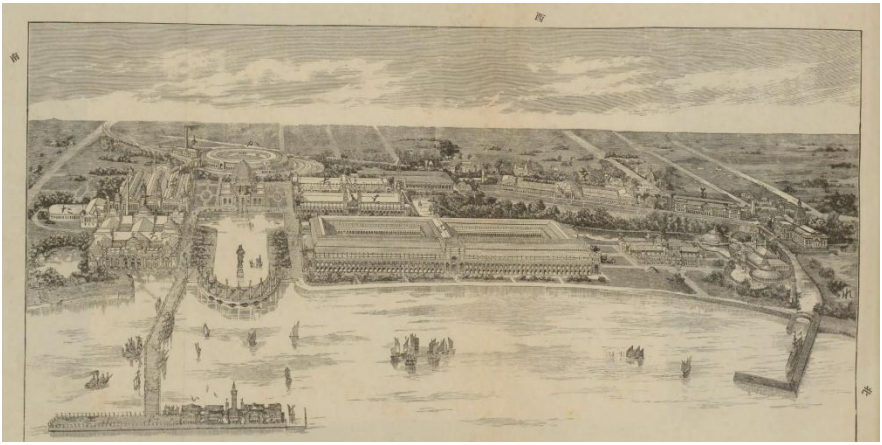

図 1　閣龍世界博覧会会場全図（『閣龍世界博覧会記事』第 1 号）

---

(5) 経済史専門の非営利プロジェクト学術的データベースサイト「Measuring Worth」によれば 1893 年の 50 ドルは消費者物価（Consumer Price Index(CPI)）ベースで 1909.52 ドルに相当するという。倍率にして 38.19 倍となるため、ここでは 1 ドル 155 円で計算し金額を求めた。

(6) 内閣官房国際博覧会推進本部事務局「大阪・関西万博の準備等に直接資する事業に係る費用」2026 年 1 月 28 日 https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/expo_suisin_honbu/pdf/cost_20260128.pdf 参照。

(7)『閣龍世界博覧会記事』第 1 号、1891 年 10 月、37 頁。

世界博覧会では出品物をAからMまでの12区に分け、全972類、172部にわたる出品陳列リストを各国に示した。教育関係は「心芸、教育、土木、工業、建築、音楽、文芸」の区画となる「Lノ区」内の第145部「初期、二期及高等教育」の第791～814類に配置された(8)。具体的には第794類「少男ニ対シ学校ニ於テ教授スル手芸、学校ニ於テ教授スル初歩職業ノ装置及要具、学校成績物ノ見本都鄙ノ初期学校」、第800類「公立学校、記事、説明、統計、教育ノ方法等」、第801類「高等教育、中学校、高等小学校及其解説、統計　分科大学及大学校、校舎、図書室、博物場、蒐集場、科程、目録、統計等ノ記事及解説」と例示された。

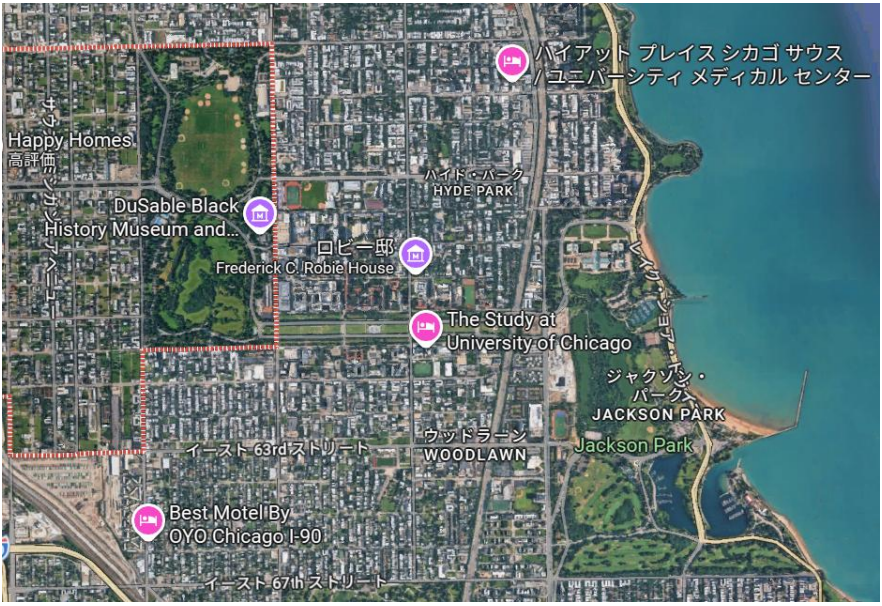

図 2 閣龍世界博覧会会場の現在の姿（Google Map）

右側の緑地ジャクソン・パークと左側のワシントン・パークおよびその間を結ぶ中央の 600 フィート幅の緑地ミッドウェイ・プレイサンスが敷地となった。

(8)「シカゴ府「コロンブス」世界博覧会出品部類目録」『閣龍世界博覧会記事』第 1 号、1891 年 10 月、8～27 頁。

日本では1891(明治24)年6月5日付で臨時博覧会事務局官制を公布し、陸奥宗光農商務大臣を総裁とし、教育関係では沢柳政太郎、菊池大麓、高嶺秀夫、岡倉覚三などの多数の「官吏其他ニ就キ学識又ハ経験アル者」を評議員とする事務局を農商務省内に設置して対応した。評議員会は「博覧会出品中に於て教育品は大に国光の発揚に関するものなるを以て、今回文部省に於ては充分の教育品をコロンブス世界博覧会に出陳すへしとのことなり。就ては其出陳方に関し周密の注意をなすことを必要なるを認められ、頃日各府県学務官の同省に参集せるを好機とし、左の如き趣意を以て出品の選択をなすへき旨を示されたりと云ふ」として次の「教育品出陳に関する注意」を示した(9)。

従来教育品を諸博覧会に出陳するに当り、往々教育の実況を表出するを務めさるものなきにあらず。例すれは生徒成蹟物中作文図画等教員の補助に成りたるものあるか如き。又裁縫品の平素使用せさる高価美麗の材料を使用したるものを見るか如し。是等は素と教育品出陳の主旨に違ふものにして、決して取る能はさる所なり。出品の取捨選択は其宜きを得さるへからす。

出品の数量は教育の実況を表出するを以て度とし、徒に饒多なるを要せす。然りと雖も優等生徒の成蹟品のみを精選し、若くは完備せる学校の写真又は器具等のみを出陳するか如きは又教育事業の状況を知悉せしむる所以にあらさるなり。

又従来の経験によるに出品の選択に就ては相当の注意をなしたるものも、其整頓配列方に至りては殆と考慮を費さゝりしか如きものなきにあらす。然るに出品の整頓配列にして宜しきを得さるときは、取捨其宜きを得たる出陳も為めに其目的を達すること能はさるものとす。殊に外国博覧会に出陳するに当りては最も意を出品の整頓方に用ゐさるへからす。

教育品を外国博覧会に出陳するは本邦教育の状況を表示し国光を発揚

(9)『閣龍世界博覧会記事』第３号、1891 年 12 月、27 頁。引用文には適宜句読点を補った。以下同様。

するを以て趣意とし、一学校一教師一生徒若くは一製造人等の名誉を表彰するを以て主とせす。従て出品の選択配列等此趣意に副はんことを要す。

教育現場にありがちな行き過ぎた指導や「優等生徒の成蹟品のみを精選し」て外面を飾ろうとする動きを制する一方で、「国光を発揚する」ような出品をと要望している。万国博覧会における日本の教育の紹介に着目したのは平田諭治氏で、ロンドン万国衛生博覧会やニューオーリンズ万国博覧会について言及され、教育の進歩を示すことにより「対外的な自己像の創出」に努めた姿が描かれている(10)。この「注意」をみてもその延長線上にあることがわかる。

「注意」では、続けて幼稚園保育用品、幼稚園保姆幼児成蹟物、小学校教授用器械標本図画、小学校用机椅子黒板等、小学校写真絵図、小学校生徒成蹟物の各項が示され、尋常中学校については、「一尋常中学校用教具器械　此等は特に本邦の製造に係り又は本邦人の工夫により改良したる者に就て出品するを可とす」および「一尋常中学校生徒成蹟物　英語作文英語習字図画等を出品するときは用紙の大小を一定し各一冊子に釘製すへし実業科成蹟物を出品するは各種二十点を限りとす都て級名生徒平均年齢等を明記し授業の順序進歩を見得らるゝ様に配列するを要す」と示された(11)。さらに尋常師範学校生徒成蹟物、尋常師範学校写真と続いた後、「一小学校中学校師範学校の教科用図書師範学校の手工科用器具及生徒給与品、中学校師範学校の写真絵図は本省に於て蒐集出品の筈なるを以て出品するを要せす」と除外品が示され、最後には「右に列挙するものゝ外、我邦教育の改良進歩せる状を示すに足るものあらは、出品あらんことを要す」と結んでいる。

---

(10) 平田諭治「1884 年ロンドン万国衛生博覧会における日本の教育の紹介」『筑波大学教育学系論集』27、2003 年、63-75 頁。平田諭治「1884-5 年ニューオーリンズ万国博覧会における日本の教育の紹介」『筑波教育学研究』2 号、2004 年、1-16 頁、参照。

(11)『閣龍世界博覧会記事』第 3 号、1891 年 12 月、28 頁。

これに応じて広島尋常中学校では「同校の写真及び図面を出陳する筈にて先頃撮影せしめたる由」と伝え(12)、滋賀県彦根中学校は「同校の敷地及建物の平面図並に写真一葉を（中略）出品せんとて何れも去三月廿六日同県庁へ申出たる由」とし(13)、兵庫県尋常中学校は「英文の書牘を出品せんとて目下協議中なる由」と伝えられた(14)。さらに京都府は「府立尋常中学校生徒製作の鉛筆画」を出品(15)、福岡県は「修猷、豊津、明善の三中学校よりは生徒各学科試験答案附解説書」を文部省へ送致したと報じた(16)。

それでは具体的にどのような「成蹟物」を出品したのであろうか。ここでは大阪尋常中学校の史料を紹介したい(17)。

米国閣龍世界博覧会ヘ生徒製品出陳ニ付予定案

英語作文

一　四級以上各級ニ作ラシム

一　文題ハ本邦ノ事物ニ取ルコト

一　四級ハ組毎ニ文題ヲ別ニシ其他ハ各級一題トスルコト

一　各自製品ニ年級名姓名年齢ヲ記セシム

但シ記名ハ本邦ノ俗ニ従フコト

一　一組ヲ一綴トシ科程一週授業時間及生徒平均年齢ヲ記載ス

但シ三級甲乙ハ合シテ一綴トスルコト

一　三項四項ハ習字図画共同ジ

文題

(12)『閣龍世界博覧会記事』第５号、1892 年２月、61 頁。
(13)『閣龍世界博覧会記事』第６号、1892 年３月、38 頁。
(14)『閣龍世界博覧会記事』第８号、1892 年６月、33 頁。
(15)『閣龍世界博覧会記事』第 10 号、1892 年９月、39 頁。
(16)『閣龍世界博覧会記事』第 10 号、1892 年９月、45 頁。
(17) 大阪府立北野高等学校所蔵。同校の『北野百年史』（1973 年、282 頁）に翻刻があるが、一部誤りを修正した。

岐阜愛知大地震　一級　元寇　二級　神后三韓征伐　三級

習　字

一　五級即チ一年生四組ニ書セシム

一　文章ハ各組之ヲ別ニシ本邦ノ事実ニ取ル

其例　一

大阪市ハ日本帝国ニ於テ商業上ノ一大都会ニシテ人口四十余万アリ淀川ノ河口茅渟湾ノ頭ニ在テ海ニハ船舶ヲ通ジ陸ニハ汽車ヲ輾ラセ市内縦横ニ運河ヲ鑿チ以テ物資ノ運漕ニ便ス第四師団本部アリ控訴院アリ造幣局アリ師団本部所在ノ地ハ高名ナル豊臣秀吉ノ城趾ナリ

図　画

一　一級二級ハ自在画及用器画トシ尚ホ自在画ハ臨画及実写トス

一　三級ハ臨画及実写ノ自在画トス

一　四級五級ハ自在画臨画トス

一　画題ハ本邦固有ニ属スルモノトス

一　用紙ハ尋常画用紙ノ四分一トス

以上

右ハ曩ニ檜垣視学官ニ示ス所トス　印(18)

これは案文ながら、これに基づき集められた出品物が実際にシカゴで展示されたようで、「善良ナル標本」と記した賞状が博覧会側から明治29年になって届いたとの記事が同校の校友会誌『六稜』第４号に掲載されている。

「国光を発揚する」ような出品物が集積することを期待する政府、それに応えて英文の手紙を出品しようとする兵庫県、成蹟物として鉛筆画を出品した京都府、同じくまさに成蹟物として試験答案を解説付きで出品した福岡県、「注意」にも関わらず写真や図面を出品しようとする広島県と滋賀県など、各府県の対

(18) 印面には矢部の文字が見える。1892 年 11 月まで校長を務めた矢部善蔵による作成と推察できる。

応にはなかなか個性が表れていた。大阪は手慣れた感じで英作文と習字と図画を出品する企画をたて、それぞれ「本邦固有ニ属スルモノ」をその根底におきつつ「我邦教育の改良進歩せる状を示」そうとした。その一方で、外国人に伝わりやすい英作文においては元寇や三韓征伐など国際的にはきわどい題材を選んでみせた。その本意はわからないが、微妙かつ面白みのある出品である。

ちなみに、博覧会跡地には「隣接するミシガン湖の湖水を取り入れた池を中心に，滝や石燈籠，太鼓橋等が配置された面積 4,000 平方メートルの本格的な池泉回遊式庭園」がある(19)。これは初の本格的な日本館「鳳凰殿」の庭園だった。大阪市は「古くから水運を軸とした商業の街として発展してきた歴史や，ジャズやブルースに代表されるような豊かで個性的な文化など，大阪市と共通点が多い都市」という縁で、1973 年にシカゴ市と姉妹都市提携を結び、締結 20 周年の 1993 年に庭園の修復に協力したことから今では「大阪ガーデン」と呼ばれるようになっているという。政府が「国光の発揚」と意気込んだ国家イベントの、最後の果実を 100 年後にさりげなく持ち帰ったのが大阪であったというのは、なんとも大阪らしい話ではないか。大阪・関西万博の後始末には、はたしてどんな「庭園」が残るのだろうか。

---

(19) 外務省 WEB「米国イリノイ州シカゴ市ジャクソンパーク内「大阪ガーデン」の修復事業」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/page25_002050.html。

＊コラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

東京教育大学新聞会の「教室の素顔　分岐点に立つ学問」特集

―『教育大学新聞』第525号（昭和45年2月10日）前半 ―

谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

当時の東京教育大学は、文・理・教育の三学部が大塚、農学部は目黒区駒場、体育学部は渋谷区幡ヶ谷、光学研究所が新宿区百人町と、キャンパスが分散していて、その狭さも問題視されていたのである。大学は、広い校地をもとめ、キャンパス統合をはかるため、1962（昭和37）年には、八王子や東松山などへの移転について検討していたが、折しも翌63（昭和38）年、首都圏基本問題懇談会が過密化した首都圏内にある一部の大学や研究機関を筑波山麓に移転させ、研究学園都市を建設すべきと答申し、研究学園都市の建設を筑波地区に行うと閣議了解なされた。

これをうけて、東京教育大学も将来計画委員会をもうけて、筑波地区への移転の是非を学内の対立と葛藤のなかで検討し、1967（昭和42）年7月、「総合大学として発展することを期し、条件つきで筑波に土地を希望する」ことを文部省に申し入れたのであった。このような大学執行部の姿勢に対し、反発する学生らは授業放棄や本館封鎖などの措置をとって紛争に発展し、1969（昭和44）年の入試は中止となった（体育学部を除く）。

さて、東京教育大学新聞会の『教育大学新聞』第525号（昭和45年2月10日）では、入試再開の受験生へ向けて、「教室の素顔　分岐点に立つ学問」特集として、以下のとおり、各学部の特色を挙げている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

文学部：文学部は充実している点では日本でも有数といわれる。だが筑波問題の一つの中心となって、教授層の全き分裂、学長による教授会の“教育の道具視”権限縮小・無視はさらに、教育大廃校・新生文学部からの反対派教育パ

ージをも予想させる。教育研究への権力の露骨な介入である筑波、その過程での学内の中央集権化に反対した教授会の今後の姿勢がその将来を決定する。と同時にそれは、全国学園闘争の中で投げかけられた「教育研究することの意味」が尖端的に問われたのであり、社会と、生きることの意味を常に問う文学部の学問内容の必然だったろう。文学部は少人数で密度の高い学習で君を鍛え、さらにその学問の意味を君に問いかけるだろう。

哲学：科学哲学は異色の講座［略］

倫理学：広く社会経済の学習も［略］

史学方法論：人類学としての発展［略］

日本史学：注目される教科書裁判［略］

東洋史学：中国史研究が中心［略］

西洋史学：学問と社会と自己と［略］

国文学：実証的国語研究［略］

英文学：文学部一の女性天国［略］

漢文学：新たなる胎動期に［略］

社会学：社会調査を中心にして［略］

法律政治学：法律専攻の目的は？［略］

経済学：マル経と筑波大学　経済学といえば、他大学では大抵は学部になっているのだが、この教室は学科にもなれない一専攻である。そんなわけで筑波大学創設の際には現在の十倍以上の規模で学部昇格するとのこと。その際学問から技術へ堕落するとのささやきもきかれる。他大学の経済学は多くはビジネスマン養成の面が強く、会計、簿記まで含むが、この教室はそういった「けがれ」の全くない純粋学問、すなわちマルクス主義経済学である。教授陣は、そうそうたる顔ぶれで、美濃部都知事も三年前までこの教室におられた。四つの講座があり、経済政策・財政学の長坂聡助教授、欧州経済史の浜林正夫助教授、農業経済学の暉峻衆三助教授、国際経済論の榎本正敏助教授、経済原論・金融論の大島清教授、経済統計学の三潴信邦教授がおられる。マルクス主義者で固まって

いるはずだったが、移転推進の巨頭を生み出して話題をまいた。学生は概しておとなしいが、処世術にたけた者も多く、在学中は政治運動に首をつっこんでいても一流企業への就職率は文学部随一を誇っている。英・独の外書購読もあり、がっちり力をつけてくれる。

教育学部：どうなる学部の未来　教育大学のしかも教育学部とは教員養成学部と世の人は考える。でも教員になる率なら他学部の方が多い。「教育学部」の二極再編の中で旧大学の教育学部も再編がせまられている。ここも筑波大学では芸術学科が独立し、高師からの教員養成は「学校教育組合研」の中に解消されるのだという。そんな中で教育学部の意味と未来が問われ直している。

教育学：人間としての教育学　教育学は雑学だと言われる。教育に関する人文社会科学から、自然科学に至るまで全て教育学の対象となり得るのである。それだけに教育学固有の学問方法がないわけでそれが教育学の今日的悩みである。しかし、いやしくも教育学は「人間とは何か」「教育の目的は何か」ということが基本的基盤となっていなければならない。つまり、現実の人間の姿を見極め、教育がどのような人間像を追求するのかを明らかにしておかないと、教育も生徒を物体の如く扱うことになりはてる。この意味で教育哲学が教育学の基本である。現代は教育目的の混乱の中にあるといわれるが、これを解決するのがこの分野の緊急課題だろう。この教育目的を受けてそれを実現するのにもっともふさわしい教育内容を選定するのが教育課程学の主なテーマである。そしてこの内容をいかにして生徒に教えるか、という教育技術学が存在する。これらの三分野が教育学の主たる領域である、というのが教育学の位置づけの定説となっている。講座は教育哲学（大浦）、日本教育史（唐沢）、外国教育史（長尾）、教育社会学（馬場・石戸谷）、教育行財政（伊藤和）、教育制度（伊藤秀）、学校教育（吉本・真野）、社会教育（平沢・永岡）、教育課程（金子）、教育方法（井坂）、社会科教育（長坂）、人文科教育（倉沢）、理数科教育（和田・吉本）、加藤教授がある。

心理学：人間行動のメカニズム解明［略］

特殊教育学：学問としての特殊教育は［略］

芸術学：奈良京都へ演習旅行［略］

絵画：さかんな創作展［略］

書：芸術としての書道論［略］

構成：新しい造形の追求［略］

彫塑：基礎をもとに創作［略］

工芸：脚光をあびるデザイン学［略］

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回は、同号で掲載された文学部と教育学部について、以上のとおり紹介・要約したものである。なお次号では、同号に掲載された理学部・農学部・体育学部の特色を紹介したいと考えている。

女子教育史散策・昭和戦時下編（86）

共立女子学園の場合2

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

『ニューズレター』第136号で、共立女子職業学校の草創期について述べた。引き続き、明治後期の様子を『共立女子学園七十年史』『共立女子学園百年史』『共立女子学園百三十年史』などを参考に述べよう。

「女子を職業人として立てるようにする術科の訓練の中で、自ずと徳性も養われる」(1)という宮川保全の方針に共鳴した森有礼文部大臣は、宮川へ絶大な援助を与えた。明治21（1888）年3月、森大臣は参内し、共立女子職業学校の生徒製品を明治天皇と美子（はるこ）皇后の御覧にいれた。このとき生徒の製品に感動された皇后から金200円という当時としては大金を下賜された。さらに翌22年4月12日、美子皇后が共立女子職業学校に行啓され、再び金200円を下賜された。時の皇后が私立学校に行啓されたのは初めてであった。

その後も明治天皇は共立女子職業学校の生徒の製品を気にかけられ、在世中に22回も御覧になった。そして明治25（1892）年2月、当時文部省から宮内省に移管され、引き続き共立女子職業学校に貸与されていた神田一ツ橋通町21、22番地（現共立女子学園本部所在地）の校地832坪、校舎318坪5合が、宮内省の通達により、共立女子職業学校に下賜されたのである。

このような恩典を受けることができたのは、明治天皇が明治12（1879）年に示された「教学聖旨」の「小学条目二件」の趣旨「実地生業に即した教育を施す」ということが、共立女子職業学校の教育で実践されていると感じられたからであろうと言われている。(2)

明治後期の発展―造花科の活躍

明治22（1889）年5月、パリで開かれた万国博覧会に生徒製作品を出品し、銀牌が贈られた。翌23年4月、第3回内国勧業博覧会に出品して有功二等賞を

受賞した。これらによって生徒製作品が優秀であることが世間に知られるようになった。中でも造花が最も世間の賞讃を浴びた。

そこで明治25年2月、造花科に定員20名の校費生制度を設けた。すべて校費で賄われ、労働しながら学習する。修業年限は3カ年で、授業料は納めず、造花に要する一切の器具材料の貸与を受けることができた。入学資格は12歳以上30歳以下、高等小学校第2学年を修了し、家事に係累のない者というのが条件であった。1カ月は試験生として借入学させて、その技能を審査し、適当と認めると本入学を許可した。半途退学を禁じられ、やむをえない事故で退学すれば在学中の費用は償還しなければならないという制度であった。

この制度を設けた理由は、諸方からの注文が多く、普通の生徒だけでは需要に応じることができないことと、造花科で学びたいと思っても学資が乏しく、あきらめる者が多くいたからであった。この校費生は後に、「造花科別科生」と呼ばれるようになる。こうして造花科は共立女子職業学校の特色となっていく。

明治26（1893）年2月、米国シカゴ世界博覧会に出品して、世界的名声をも高めるようになった。術科の修業の材料は生徒自弁なので、熟練するには多くの材料が必要である。そこで広く世間の注文を受けた。殊に宮内省から多くの造花の注文があった。さらに米国のニューヨーク府起立工商会社等からも多くの注文を受けた。これらによって生徒は他の材料で修習することができた。他の各学科も外部からの注文が多く、校内の販売品すら製作する暇がない状態であった。そのため学校は女子技術者養成所と化し、着物に白前掛をかけて造花工場のようであったという。

また、毎年1回以上朝野の紳士淑女を招待して、生徒の授業及び製作品を観覧してもらい、製品を販売した。明治26年11月の第5回バザーは、来観人1万余人、製品売却高389円余で盛況だった。

製品販売によって得た利益を貯金させることは明治20（1887）年から始まっていた。明治30（1897）年3月、乙科卒業の佐藤（旧姓井上）まつのの手記に、「…外部からも製作の注文を引き受けその代金は生徒へ分けられ、知らぬ間に

貯金が出来て居りましてびっくりいたしました…」(3)とある。これは、節倹貯金の良習を養うとともに技術を身に着けることができ、収入を得ることにもつながる当時としては画期的なシステムであった。

明治後期に生徒製品の出展で表彰を受けた主なものは以下の通りである。(4)

明治28（1895）年6月、第4回内国勧業博覧会、有功一等賞

明治33（1900）年2月、仏国パリー万国博覧会、大賞・銀牌

明治36（1903）年1月、第5回内国勧業博覧会、一等賞牌

明治37（1904）年1月、米国セントルイス万国博覧会、最優等大賞牌

明治40（1907）年3月、東京勧業博覧会、名誉銀牌

明治43（1910）年5月、日英大博覧会、名誉大賞。この時、造花科出品に対し、英国園芸協会より銀製大盃を贈られる。

実業学校として

明治27（1894）年7月、「徒弟学校規程」（文部省令第二十号）が公布された。第一条で「徒弟学校ハ職工タルニ必要ナル教科ヲ授クル所トス」(5)と定められた。この第十五条に「女子ニ刺繍、機織及其ノ他ノ職業ヲ授クル為ニ設クル所ノ女子職業学校ニシテ此ノ規程ニ依ルモノハ徒弟学校ノ種類トス」(6)とある。これによって、共立女子職業学校は徒弟学校という位置づけがなされた。

明治32（1899）年2月、「中学校令改正」「高等女学校令」「実業学校令」が公布された。文部省は「実業学校令」（勅令第二十九号）において、第一条で「実業学校ハ工業農業商業等ノ実業ニ従事スル者ニ須要ナル教育ヲ為スヲ以テ目的トス」(7)と規定した。その種類は工業学校、農業学校、商業学校、商船学校及び実業補習学校とし、「徒弟学校ハ工業学校ノ種類トス」（第二条）(8)と規定した。これにより共立女子職業学校は工業学校という位置づけがなされた。実業学校は甲種、乙種に分かれ、甲種は高等小学校卒業以上、乙種は尋常小学校卒業以上を入学資格とした。徒弟学校は乙種実業学校に相当するものと考え

られ、共立女子職業学校は乙種実業学校と同格になり、低度の中等実業教育を授ける学校として生徒を集めることになった。(9)

財団法人 共立女子職業学校

明治31（1898）年6月、民法が制定され、公益法人の制度ができたので、宮川は学校に投じた私財を寄付し、法人組織に切り替え、同年10月東京府知事宛に財団法人の「認可願」を提出した。翌32年1月、認可がおり、「財団法人共立女子職業学校」が発足した。財団役員は大半が創立時の発起人であった。「認可願」の第二条で目的は「本校ハ女子ニ適応セル技芸職業並ニ必要ナル学科ヲ授クルヲ以テ目的トス」(10)とした。資産総額は3万7,000余円であった。

明治37～38（1904～1905）年の日露戦争勝利後、国勢の発展に伴って女子教育を施す学校が増設された。38年度における高等女学校は官立1、公立88、私立11、合計100校であった。その後も増加し続け、43（1910）年度には官立1、公立145、私立47、合計193校とほぼ倍増した。さらに同年10月には、高等女学校令が改正され、家政・商業など特定の実業科目の履修に重点を置く「実科高等女学校」の設立を認めた。実科高等女学校は郡立・市立の設置が多く、設置が比較的容易であったため急増した。大正4（1915）年度には高等女学校223校、実科高等女学校143校、合計366校となった。(11)

こうした教育状況の変遷をふまえて、共立女子職業学校は職業教育の学校であり、普通高等教育を授ける高等女学校とは目的が違ったが、高等女学校では裁縫の時間が多く、大量の裁縫教員を必要としたことから、高等女学校などの裁縫や手芸を教える教員の養成に力を入れていくことになった。

教員養成のあゆみ

共立女子職業学校の特徴である教員養成、教員免許に関する取り組みを『共立女子学園百三十年史』『共立女子学園百年史』により概略しよう。

明治27（1894）年7月、「家庭科」が設置された。それまで卒業生が個別に教員免許を取得するために検定試験を受けていたが、検定試験に合格するのは非常に困難であったため、学校として制度化する試みであった。明治31（1898）年4月、学則改正で「裁縫教員養成科」と名称を変更し、甲科・乙科の卒業生がもう1年学修する課程に変更となった。従来の「家庭科」は甲科・乙科の別メニューであり、2年間の学修で小学校の裁縫教員になる道が開かれていたが、「裁縫教員養成科」では計3年間（甲科生は4年間）かかることになった。共立女子職業学校の卒業生が取得できた免許は、当初は小学校の専科の准教員であったが、明治33（1900）年の小学校令改正で、専科については准教員の制度がなくなったため、専科・正教員の免許申請となっている。ただし、正教員になるには一定期間私立学校などでの教育経験が必要なため、共立女子職業学校を卒業してすぐに正教員の免許申請はできなかった。

「裁縫教員養成科」は、明治36（1903）年3月廃止され、4月から「補習科」となった。補習生はその卒業した「術科」について1年間研究するとともに、修身・教育・家事・体操の学科（週当たり計6時間）を学修する。社会の要求に答えるため、明治37（1904）年から裁縫教員と併せて、手芸すなわち編物・刺繍・造花・図画の手芸科教員養成も行われることになった。そのために「補習科」と名称を変更した。

明治40（1907）年4月、文部省令第十三号により、教員検定ニ関スル規程（以下、教員検定規程と略）が改正され、第六条第三号で、裁縫科の中等教員検定試験の受験資格を「高等女学校ニ於ケル修業年限三箇年以上ノ技芸専修科ヲ卒業シタル者」とした。これにより高等女学校以外の学校の卒業生は出願資格がないことになる。しかし、翌41年11月、文部省令第三十二号でさらに改正され、第六条第二号で、「文部大臣ニ於テ適当ト認定シタル学校ヲ卒業シタル者」も「数学科、物理及化学科、博物科、裁縫科、手芸科」の検定試験が受けられることになった。また同条第三号では、「高等女学校ノ修業年限三箇年以上ノ技芸専修科ニ於テ主トシテ裁縫又ハ手芸ヲ学修シ卒業シタル者」に裁縫科

または手芸科の受験資格を与えるとしている。従って、共立女子職業学校も一定の条件を満たせば、高等女学校の技芸専修科と同等に認定される可能性が出てきた。

明治42（1909）年2月、教員検定規程第六条第二号に基づく認定に関する文部省令が出された。創立から10年以上経過し、管理・維持の方法が確実で、その学科を教授するに足る教員・設備が備わっていること、入学資格が修業年限2年の高等小学校卒業者（旧小学校令では修業年限4年の高等小学校卒業者）かそれと同等の学力を有すること、裁縫科・手芸科の場合は修業年限が2年以上であること、というのが認定を受けるための条件であった。同月22日共立女子職業学校は甲乙両科に「受験科」を設け、文部省に認定申請を行い、文部省は4月17日の文部省告示で認定した。

共立女子職業学校『二十五年史』には、甲乙ともに「受験科」の卒業者で、裁縫科修了の者には裁縫科の受験資格を、甲科受験科の卒業者で編物・刺繍・造花のうち2科目修了者には手芸科の受験資格を与えることが認定された旨が記されている。なお、「受験科」の設置時期や卒業生の人数など不明な点はあるが、ともあれ「受験科」の設置により中等教員になる道が開かれ、昭和5（1950）年3月廃止されるまで続いた。

次に目指すのは、無試験で中等教員免許が得られることである。そこで明治42年2月「師範科設置願」を東京府に提出したが、認可にならなかった。その願書の内容を手直しして、「本校卒業生の女子師範学校及び高等女学校に奉じ裁縫科及び手芸科の教授に当るもの頗る多く其の成績もまた一般の認むる所であるから、本校甲科の規定に修正を加へ、教員志望を有するものを以て学級を組織し、必要なる学科を補足し、以て一層適良なる教員を養成する」(12)という理由をつけて、明治44（1911）年2月、「甲科高等師範科設置願」として申請した。同年4月26日、甲科高等師範科の新設ならびに、同科の卒業生に対する裁縫科・手芸科の中等教員無試験検定が文部大臣から認可された。ただし、明治47（1914、大正3）年3月以後の卒業者に限るという条件であった。そして大正

3年3月には「甲部高等師範科」（明治45年に甲科から名称変更）からは38名が卒業した。

さらに明治45（1912）年4月から共立女子職業学校は、東京女子高等師範学校内に設置された第六臨時教員養成所から裁縫・手芸の学修の生徒の教育について委託を受けることになった。高等女学校・実科高等女学校の急増に伴う中等教員不足に臨時教員養成所を設置しても対応できないため、教員無試験検定の許可を得た公私立の学校に委託したのである。委託生は、共立女子職業学校で所定の学修を終えれば、官立学校の卒業者と同等に扱われた。この委託生の制度は大正13（1924）年4月まで続いた。

以上のような教員養成、教員免許状をめぐっての取り組みからも、共立女子職業学校が世間で高い評価を受けていたことが窺える。

明治45（1912）年の学則改正―「家庭科」新設

明治45年1月、学則が改正された。従来の甲科・乙科を「甲部」「乙部」と改称した。乙部に修業2年の「家庭科」を新設した。家庭科は高等女学校の卒業生を受け入れ、裁縫の熟達、家事に関する一切の知識の習得、割烹・洗濯色染の技能の習得を通じて「家庭婦人」を養成するもので、いわば良妻賢母教育の完成を期するものであった。

これに伴い、共立女子職業学校の設置目的は「本校ハ女子ノ職業又ハ家政ニ須要ナル技芸及ヒ学科ヲ授ケ兼テ之カ教員タラントスル者ヲ要請スルヲ目的トス」（学則第一条）となった。これまでは「技芸職業に必要な学科を授ける」としていたが、改正学則では「職業又は家政に必要な学科を授ける」と二つの目的を明記した。高等女学校卒業生の入学が漸増するため、入学者に対する最も有効な教育を施すためであったという。

手島精一校長は、この「家庭科」主任に、共立女子職業学校の発起人の一人であり、商議員であった鳩山春子を起用した。手島は「どうも高等女学校だけでは良妻賢母となるにはまだ不足だから此学校で是非高等女学校の仕上教育を

したい、夫については決して干渉せず、一切を委かせるから是非学校に出て事に当ってもらいたい」(13)と依願したという。その頃春子は夫和夫が病死し、二人の息子も独立したため、社会的活動を行うことが可能になっていた。以降、春子は家庭科の主任として運営にあたるとともに、修身・家庭教育の授業を担当し、大正後期には共立女子職業学校を代表する学科に成長させる。時の文部省が推奨する「良妻賢母教育」の波に乗って急成長するのである。

注

(1)『共立女子学園七十年史』26頁

(2)『共立女子学園七十年史』30・31頁、『学制百年史』資料編7頁

(3)『共立』臨時第六号、昭和二十八年、『共立女子学園百三十年史』52頁より

(4)『共立女子学園百年史』144～147頁より

(5) (6) (7) (8)『学制百年史』資料編 191・192 頁

(9)『共立女子学園七十年史』41・42 頁

(10)『共立女子学園百年史』151頁

(11)『共立女子学園百三十年史』58・59頁、『日本帝国文部省第三十五年報』167頁、『文部省第四十五年報』上巻130頁

(12)『共立女子学園百年史』189頁

(13)『共立女子学園百三十年史』71頁

参考文献

『学制百年史』、『学制百年史』資料編 文部省

『共立女子学園七十年史』

『共立女子学園百年史』

『共立女子学園百三十年史』

進学案内書にみる戦前期東京の予備校（25）：

『一目瞭然東京遊学学校案内』（大正 11 年）（1）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（慶應義塾大学非常勤講師）

今号からは、大明堂書店より刊行された『一目瞭然東京遊学学校案内』を見ていく。今号では、書誌的な情報と予備校全般について述べた箇所を見ていく。

この進学案内書の著者は、出口競である。その肩書は「学生社理事」となっている。1917（大正 6）年に刊行された『最新式入学案内』では、「東京学生相談所主」という肩書であったが、この間に何があったかは不明である。というより、出口競という人物の情報が極めて少ない。

菅原亮芳『近代日本における学校選択情報:雑誌メディアは何を伝えたか』（学文社，2013）にある進学案内書の一覧によれば、この進学案内書は1922（大正 11）年の刊行後、1927（昭和 2）年まで毎年刊行されている。さらに付け加えれば、1922（大正 11）年版は、近代日本青年期教育叢書の第５期（進学案内）第 13 巻として日本図書センターより 1992（平成 4）年に復刻されている。

筆者が確認したもの（国立国会図書館のデジタルコレクション）には、1923（大正 12）年版と 1927（昭和 2）年版がない。そこで、本連載では、上述の 2 冊を除いた 4 冊を検討の対象とする。

毎年刊行され続けたとはいうものの、情報の変化には乏しい。そこで、まずは最初の版である 1922（大正 11）年版の情報を見た上で、後の版で変わった内容についてまとめて触れるという形で検討を進める。

1922（大正 11）年版は、「第一篇 （人と学校との関係）」「第二篇 （東京の知識）」「第三篇 （学校篇）」という構成になっている。なお、表題の「（）」は原文のままである。1924（大正 13）年版では「第三篇 （中等学校と編入試験）」が加わり、学校篇が第四篇に繰り下がった。1923（大正 12）

年版を見ていないので、新たな第三篇が加わったのが 1923（大正 12）年版か 1924（大正 13）年版かは不明である。

第二篇には「四、上の学校への足溜り―此が東京の味、予備校と其の活用―」という表題で、予備校全般について解説されている。1922（大正 11）年版の記述は以下の通りである。本文では、漢字のほぼ全てに読み仮名が振られているが、全て省略した。

私は、中学校を、更に遡つて高等学校を以て「中継ぎの学校」又は『中間地帯』と名付けましたが、まだ此の他に言ひ忘れた事があります、それは、中間地帯から専門学校へなり又は第二の中間地帯である高等学校へ進むまでの足溜りとしまして予備校を説明する事を致さねばなりません、尤も文中には句はして置きましたが東京の有り難味は一つは此の予備校にあるとも申しませうか、此れは大抵の人が一度は厄介になるものであります。凡そ試験の中で、何が一番難しいかと申せば専門学校の入学については英語・数学の二つに止めを刺すでありませう、無論、物理、化学、国語漢文、地理歴史の類も難しいには相違ありませんが、何と云つても一番額にしわの寄るのは此の二つである。英語は今は世界語を以て目されて居る位であるから、もう少し勉強したらよさ相なものであるが、なかなかよう行らない。此学科を中心にどこの試験場へ出してもビクともせぬと云ふ勇気を練る、夫れが即ち予備校であります。

尤も、予備校の目的はそれ許りではありません、此れを箇条書に致しますなれば、先づ

一、中学四年修了者、同卒業者、工業農業商業各中等学校卒業者がそれぞれ専門の学校へ進む為めの試験準備としての学力の養成をする者

二、高等小学や尋常小学で勉強のその暇無かりしものが、上へ進む都合上中学卒業乃至各学校受験資格を得る為め専検高検を目的として入学し研鑽する者

の二つに分ける事が出来ませう。京都、大阪にもそれがありますが、夫れ等は科学的に錬磨されて居らない、受験準備機関としてはどうしても東京であります。なほ近来その方には、もう一層分科的な行り方が見えまして、数学丈けの講習会、英語丈けの講習会と云つた様なものさへ弗々見えてきた状態であります。

―受験準備専門―

早稲田高等予備校（早稲田大学区画内）

日本高等予備校（日本大学内）

高等予備校（専修大学内）

明治高等予備校（明治大学内）

東京高等予備校（法政大学内）

中央高等予備校（中央大学内）

大正高等予備校（錦城中学校内）

日土講習会（東京工科学校内）

其他

正則英語学校、同予備学校、国民英学会、普及英語学校、日進英語学校、研修英語学校、研数学館、開成予備学校、其他略。

―中学卒業程度の学力を目的とするもの―

開成予備学校

錦城予備学校 （共に夜学）

正則予備学校

正則英語学校 同一経営（午前午後夜学の三部）

かうなつて居るのであります。まだ書き洩らしたものがあるかも知れませぬが、実に盛なものであります。

「受験準備専門」の予備校の中には、他校の中に設置されているものがある。私立大学系の予備校は基本的にその大学内にあるので当然のことな

のだが、ここでは東洋高等予備校が出てきていないし、「学校篇」にも記載はない。早稲田高等予備校は早稲田大学の区画内、大正高等予備校は錦城中学校内、日土講習会は東京工科学校内に設置されているとあるが、日土講習会の情報は 1922（大正 11）年版には掲載されていない。

次号からは、「第三篇　学校篇」に掲載された予備校の情報を見ていく。

『嘉納治五郎』（1964年）を読む(9)

嘉納塾における嘉納治五郎（その4）

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

はじめに

この連載「『嘉納治五郎』（1964年）を読む」を投稿するのは、第129号（2025年9月15日付け）以来約9ヶ月ぶりになる。その間、短評・文献紹介やコラムは書いていたが、やはり継続した研究活動として連載記事は書いていきたい。

嘉納治五郎の教育活動の原点であったと推測できる1882年創設の嘉納塾のことを、これまで第126号（2025年6月15日付）、第127号（2025年7月15日付）、第129号（2025年9月15日）で取り上げてきた。

第126号では嘉納塾の略年表で塾の主要な歩みを確認し、第127号では創設時の嘉納塾において、若年の塾生たちの我儘や惰弱へを警戒する意味から厳格な訓育方針が採用されていたことを紹介し、第129号では嘉納塾での厳格な教育方針の詳細を、日課（寺院に似た早朝起床、清掃など）や厳しい監督などの具体例を通して見てきた。

しかし、嘉納塾での塾生生活は単に厳格なだけではなく、茶話会など、娯楽を含む行事も行われていた。本号ではそれを紹介していきたい。

休日夜に開催された様々な茶話会

嘉納塾では以下のように、複数の種類の茶話会が塾の方針によって定期的に開催されていた（『嘉納治五郎伝』134頁を参照）。

これらの会合では、当番の塾生によって茶菓（このために各回分の参加費が集められた）が提供され、講演、談話などが終わった後は一同での遊戯や歓談もおこなわれており、塾生活において、楽しみの要素となっていたと思われる。

（1）「中幼年部合併会」（毎月第一日曜日の夜）

塾生活の諸問題を、中年舎と幼年舎の塾生たちが夕食後に集まって協議する茶話会が、毎月第一日曜日の夕食後に開かれた。

（2）「中幼年舎合併懇話会」（毎月第三日曜の夜）

中年舎と幼年舎において、輪番で2～3名の塾生が自作の詩文・研究報告、体験談等を他の塾生たちの前で講演するという趣旨の茶話会が毎月第三日曜の夜に開かれた。

（3）中年舎の「朗読会」（毎週土曜日の夜）

中年舎では、有益な文章を朗読して紹介し合う会が、毎週土曜日の夜開かれた。

（4）「幼年舎談話会」

幼年舎では、2～3名の塾生が交互に、将来の志望や、学んだり読んだりした問題などについての考えを語り、大人の指導者である舎長がこれを論評して指導するという形式の談話会形式の茶話会が開かれた。

（5）送別会、歓迎会

上記の定例会以外にも、塾生の出入があるごとに、送別、歓迎の茶話会もおこなわれた。

こうしてみると、毎月2回か3回程度は夜、定例の茶話会がおこなわれ、塾生の茶菓や遊戯を含む交流がおこなわれていたことが分かる。また、幼年舎だけの「談話会」では舎長からの講評や指導が丁寧におこなわれ、中年舎では塾生同士の自主的な要素が大きくなっていたことも推測できる。

毎年11月の「進遷式」

そして、毎年11月におこなわれた「進遷式」は、年齢によって幼年舎生が中年舎へ、中年舎生が成年舎へ進む塾生活の画期を祝う行事で、以下のような様子であったという。これは大茶話会付きの卒業式・入学式的な行事であったといえ

るだろう。そして嘉納塾長の訓示が必ずおこなわれていたことも分かる。

> この時にはそれぞれの舎生の代表が送別、歓迎の辞を延べ、また進遷する塾生の側からは答辞があり、最後に塾長嘉納が訓示を与えるのが例だった。またこの日は嘉納塾同窓会の総会をも行なった。嘉納の訓話、舎長による塾の概況報告の後、宴が開かれ詩吟、琵琶、仮装、寸劇などの塾生の苦心になる盛沢山の余興が歓を添えた。
> （『嘉納治五郎伝』136頁を参照）

こうした茶話会は、娯楽の面も含みつつ、塾長（嘉納治五郎）および舎長（嘉納の柔道の弟子など）の指導とセットであったという点は見逃せないだろう。

次号では、塾内誌『気帥』、塾生の身体的鍛錬などについて述べていきたい。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2026年2月15日改訂）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（著作権の許諾確認）記事のなかで用いた写真画像などに著作権が生ずる際には、著作元または所蔵先に執筆者が許諾の確認を行ってください。それが大学等の出版刊行物ならば、当該大学の事務部または資料館等の施設に照会し、適切な対応をはかってください。確認がとれたものを用いることとして、確認がむずかしいものについては、写真画像の掲載を差し控える必要があります。

8.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

9.（レイアウト等）毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

10.（web公開）ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

11.（研究交流会）ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

12.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

2025年12月に、dアニメストアで「印象的なライバル／敵キャラの登場シーン」特集についてアンケート募集を行っていて。私も推しの作品キャラを、つい投稿したところ。先日、そのアンケート結果が発表され、幸い私が推した2作品キャラも掲載されていて。正直、作品キャラを愛するものとして、うれしかった！ですね。まず、AZALEA（パリピ孔明；第11話）だ。投稿者コメント：渋谷109決戦で、遅れてAZALEAが登場するシーンはなんともいえず、主人公の英子らに立ちはだかる強敵としてかなりスタイリッシュで衝撃的。でも、英子らの熱くひたむきな新曲披露をうけて・・盤石であったAZALEAも、純粋に音楽へ熱中していた若い頃に原点回帰し、遂に生まれ変わることに。そして、英子らの健闘を素直に讃えつつ、109前の聴衆らに対し、今の自分らの素直な気持ちでバンドが愛する音楽を演奏するのであった。主人公ら以上にもえるAZALEAだ。

次は、スタグネイト《遣い》（最果てのパラディン　鉄錆の山の王；第5話）だ。投稿者コメント：不死神であるスタグネイトの分身がいまだ降臨できないため、遣い「ヘラルド」が登場。神とはいえ、あまりにおしゃべりだ。ともしびの神「グレイスフィール」と敵対していながらも、主人公に邪龍討伐を思い止まらせるべく啓示する。自重せよ・・と。英雄勇者が無念のうちに力尽きるのは忍びないとばかりに。不死神《自身》こそが、最大最高のライバルでなければならない。実は、回りくどい説得のごとき、神なりの告白？だった。実は3作品め推しキャラも投稿しようと考えていたのですが、締め切りまでの時間制限で断念。この無念は、新企画「愛するおバカキャラ」アンケートにて、リベンジなるでしょうか。（谷本）

髙橋裕子編著『女子教育のパイオニア　津田梅子』――その生涯と女子英学塾建学の精神――を読んで

2024年7月3日から樋口一葉に替わって、新五千円札の肖像に登場した津田梅子は、津田塾大学の前身女子英学塾の創設者である。2024年は梅子の生誕160年にあたっていた。同大学では「津田梅子と建学の精神」という大学共通科目を2017年度から設定し、学生が自校史を学び、建学の精神や教育の特色を学ぶ機会としている。本科目は複数の担当者によるオムニバス授業で、そのテキストとして、2025年、創立125周年記念事業として編まれた。同書は、梅子の研究者でもある髙橋裕子学長を中心として、梅子や梅子の周辺の人々などを研究してきた11名によって執筆されている。

第Ⅰ部は、幼少時代の梅子が日米両国においてどのように育まれていったかについて、第Ⅱ部は、アメリカ留学から帰国後、華族女学校への奉職、再度のアメリカ留学、塾創設

前のアメリカやイギリスでの視察について、第Ⅲ部は、梅子を支援し、女子英学塾の運営に支援した国内外の人々について紹介している。

学生だけではなく一般の人々にも広く読んでほしいとの願いから、「読みやすく、分かりやすく」をモットーに執筆・編集されており、津田梅子という人物や梅子の教育精神を知る上で最適なテキストである。各章の最後にはその章のエッセンスを示す簡潔な「津田梅子の残した言葉」を紹介している。例えば第八章では、1900年9月、女子英学塾開校式式辞で梅子が述べた「…英語を専門に研究して、英語の専門家にならうと骨折るにつけても、完たい婦人となるに必要な他の事柄を忽せにしてはなりません。完たい婦人即ちall-round womenとなるように心掛けねばなりません。」が紹介されている。梅子が目指したリベラルアーツ教育と専門教育の機会を開くという建学の精神の中核になる言葉である。

梅子の功績の一つは、二度目のアメリカ、ブリンマー大学留学中に、8,000ドルの寄付金を集め「日本女性米国奨学金」制度を創設したことである。この制度を使って1976年までに25名が留学し、多くの女性リーダーや梅子の後継者が誕生した。また、この組織が母体となって、梅子が女子英学塾を開設する時の支援組織が作られた。

特に第七章は、梅子が女子英学塾を開設する決め手となる事柄が記されていて興味深い。梅子は、女子英学塾を開設する2年前にアメリカでヘレン・ケラーとアン・サリヴァンに会い、1年前にイギリスでナイチンゲールにも会うことができた。それらのall-round womenから情熱やパワーをもらった。半年間のイギリス滞在中に、梅子が意欲的に名門大学や女子学校を視察したり、日本にゆかりのある著名な大学人と面会したりしたことが詳述されている。

梅子は、ブリンマー大学留学中に、女子に高等教育を授ける学校の開設を思い立ってから約10年、周到に準備を整え、熟考の末、1900年9月、10人の生徒を迎えて女子英学塾を開校した。華族女学校や女子高等師範学校の教授として年報800円という当時としては高給で安定した地位を捨てて、あえて茨の道を選んだ。キリスト教精神に基づく教育を抱きながら、ミッションに頼らず、友人たちの協力を得て、自らも内外で資金面の支援組織作りに奔走した。そして、当時、女子高等師範学校以外には、女子に高等教育を授ける学校がなかった時代に、女学校卒業後の女性がさらに英語を学んで、教師として、あるいは社会人として自立できる道を切り開いた。

私はこの本を読んで、改めて梅子のパイオニア精神と行動力に感銘を受けた。次代を担う多くの人々に読んでもらい、第二第三の梅子が出現することを願う。（長本）

2025年10月刊、ミネルヴァ書房、236頁、2,000円（税別）

佐藤まどか著『少女と毒』（講談社、2026年）を電子書籍版で読んだ。佐藤まどかは、イタリアに在住し、プロダクトデザイナーとして活動しながら数多くの児童文学やYA文学を発表している作家である。私がこれまで読んできた佐藤まどかの作品には、『マジックアウト』三部作（フレーベル館、2011年、2012年、2013年）、『一〇五度』（あすなろ書房、2017年）、『アドリブ』（あすなろ書房、2019年）、『ノクツドウライオウ　靴の往来堂』（あすなろ書房、2023年）などがある。これらは、ファンタジーの要素、ものづくりの要素、イタリアでの生活の要素などが含まれた多様性があるが、いずれも描写の密度が濃くて、読者にとって追体験しやすい作品になっているように感じている。

今回読んだ『少女と毒』は、家出を決意した中学2年生の女子生徒が、「一人で生きていこう。なんとかなるだろう」「トー横に行けば仲間ができるはずだ。そう信じないと一歩も踏み出せない」という思いから、家出して東京・新宿歌舞伎町の「トー横」に行くという場面から始まる。

主人公は、そこで家出の先輩たちや、複数の大人たちに関わりながら、様々な経験をしていくが、「だれを信じる？」「だれから逃げる？」ということを主人公は常に悩みながら行動していく。

文学作品でありルポではないが、リアリティを感じる読み物になっている。（冨岡）

会員消息

先日、勤務する大学研究所に私宛ての英文メールを、イスラエルのテルアビブ大学に勤める比較高等教育史研究者からご丁寧にいただいた。聞けば、NLを始めとした私の研究著作などをいろいろ興味深く読んでいただいているのだという。率直にサンクスだ。

I have been exposed to your fascinating and interesting research on the history of higher education in Japan.［いただいた英文メールからの一部引用］

たいへんありがたい・・限りであるが、実のところ国内外の読者が、NLなどに掲載された私の原稿を読んでくれていると思うと、ちょっと気恥しい思いがしてしまう。まだまだ不十分で調査足らずな点も多いゆえ、さらなる奮起をしなければならないだろう。世話人の冨岡勝さんも、つねづねこのNLで継続的に原稿を発表する！ことを貴重な場として強調しているが、なにがしかの読者との交流のご縁も大いにあり得るので私も重要だと思う。同人

のみなさんも、オールド・タイプな私とはまた違った意味で、自身の仮説や持論を発表して読者らと有意義な論争など積極的に行っていただければ幸いである。期待したい。（谷本）

本号も原稿を掲載できませんでした。落ち着いて研究時間を確保したいのですが、なかなかうまくいきません。なんとか少しずつ研究を進めていきたいです。（山本剛）

旧制高等学校記念館夏期教育セミナーの開催案内が、同館Webサイトで発表されました。今年は8月29日（土）～30日（日）、テーマは「校歌からみえる日本社会－校歌がうたわれてきた歴史を通して」です。みなさん、1日目の懇親会の分も含めて、ぜひ参加のお申し込みを。松本でお会いしましょう！（冨岡）

――第29回夏期教育セミナー開催のお知らせ【8月29日（土）、30日（日）】――

旧制高等学校記念館では、毎年夏に市民、学生、研究者がともに学ぶ「夏期教育セミナー」を開催しています。

第29回の夏期教育セミナーは、「校歌からみえる日本社会－校歌がうたわれてきた歴史を通して」を主なテーマとし、研究発表を含めた2日間の日程で開催します。

≪開催日時と内容≫

日時：8月29日（土）、8月30日（日）

場所：あがたの森文化会館（旧松本高等学校）講堂

【1日目：講演会ほか】

（8月29日（土）午後1時00分～午後5時00分）

■第1講演

「学校は、いつ、いかにして校歌をつくったのか（仮）」

講師：須田珠生さん（小樽商科大学　准教授）

■第2講演

「校歌は誰に、どのように歌われてきたのか（仮）」

講師：渡辺裕さん（東京大学　名誉教授）

【2日目：研究発表会】

■研究発表（8月30日（日）午前9時30分～午後3時00分）

研究発表１　高等女学校の歌唱教材にみる洋楽受容－卒業式の歌の原曲を手がかりに－

越山沙千子さん（明星大学　准教授）

研究発表２　旧制伊那中学校応援歌の成立過程－替え歌応援歌から自前の応援歌へ－

岩崎靖さん（伊那北高等学校同窓会事務局長　元同校校長）

研究発表３　戦後の大学学生自治会の成立－東京大学・京都大学・早稲田大学の事例から－

田中智子さん（法政大学　大原社会問題研究所　専門嘱託）

■研究情報交換会《自由参加》（８月30日（日）午後１時30分～午後３時00分）

参加者間で研究関心・研究関連情報などを紹介し合い交流。

詳細については決まり次第、随時更新いたします。

≪参加申し込み≫

・参加費無料。

・参加には事前申し込みが必要になります（お名前、連絡先など）。

―参加ご希望の方は、旧制高等学校記念館までメールまたは電話によりご連絡をお願いします。

・１日目（８月29日（土））の終了後に懇親会を予定しております（希望者のみ）。懇親会への参加を希望される方は、本セミナーへの参加お申し込みの際にあわせてお知らせください（懇親会会場の都合上、懇親会への参加ご希望の方はお早めにお申し込みください）。

・激甚な自然災害等により対面開催が困難と判断した場合、オンライン開催に切り替える可能性があります。その場合は 事前にホームページ等でお知らせします。

なお、オンライン開催の場合はZoom（オンライン会議システム）を使用するため、参加者ご自身で事前にZoomのダウンロードが必要になりますのであらかじめご了承ください。参加申し込みをいただいた方に、参加用のZoomミーティングIDを送付します。

皆さまのご参加をお待ちしております。